

倉田 悟※ シダ類ノート (10)

S. KURATA : Notes on Japanese Ferns (10).

✓ (30) ツクシイワヘゴ 本羊歯は先に本誌3巻3号に述べた如く、一見した所イワヘゴに極めて近似のもので、従来屢々それと混同されていた。東大理学部及び国立科学博物館の腊葉を検べると、南九州にはイワヘゴよりもむしろツクシイワヘゴの方が多いのではないかとさえ思われる。ツクシイワヘゴは包膜が発育不全である事その他、羽片の数が概してイワヘゴより少い事も一特徴である。即ちツクシイワヘゴではどんなに良く発育しても羽片は20対迄で、通常17・8対位であるが、イワヘゴは20~25対位を普通とする。勿論、イワヘゴにおいても小型のものは羽片の数も減少する。一方、タイワシクジヤク (*D. Scottii*) の羽片はずつと少くて通常10~13対であるから、はつきり区別出来る。又、葉柄の鱗片がイワヘゴでは少くとも基部のものが黄褐色になるが、ツクシイワヘゴではタイワシクジヤク同様基部のものは多少色の淡くなる事はあるにしても通常、上部の鱗片と変化なく黒色を呈する。以上の諸性質を総合して私はツクシイワヘゴをイワヘゴとタイワシクジヤクとの中間的な性質を具備した独立の一種と考える。更に注意すべきは、千葉県清澄山には包膜が極めて顕著でイワヘゴと同様にソーラスを始め全く被っている株が見られる事である。これをイワヘゴとすべきかツクシイワヘゴとすべきかは微妙な問題であるが、包膜以外の性質はツクシイワヘゴに良く一致するので、一応ツクシイワヘゴにもこの様な極端型があるものと考え、今後の研究に待ちたい。

南支(広西・広東)と東京に産する *D. liankwangensis* CHING はツクシイワヘゴに近縁の種類と思われるが、包膜は全くなく、葉柄・葉軸の鱗片が異なっている。

(31) タニヘゴモドキ 本羊歯は1937年田川基二先生により発表記載され、FAURIE氏が1912年陸奥国小湊で採集されたものが原標本である。近年、新産地として愛知県北設楽郡振草村(田川基二、植物分類地理14巻3号、1951年)群馬県尾瀬ヶ原(大村敏朗、若名東一:上州羊歯植物目録、1955年)、埼玉県秩父市(守屋忠之、野草No.199、1956年)が報告されているが、さしたる論議は加えられていない。実は田川先生の新産地報告を見て私は大変びっくりしたのである。というのは鳥居喜一氏と私が植物研究雑誌26巻7号にミヤマベニシダとして報告したものがそれだからである。之をミヤマベニシダとした私の不明は赤面の到りだが、この東三河のものは葉柄下部にミヤマベニシダと全く同様の栗色の鱗片を有し、タニヘゴモドキの記載とは全く異っている。即ちタニヘゴモドキではタニヘゴ同様の淡褐色の鱗片を有すると記載され、更にタニヘゴとオクマワラビとの間種ではないかと想定されている。その様な訳で東三河のものがタニヘゴモドキであろうとは全く思いも及ばなかつたのである。それ以後色々検討して見た結果を以下に述べて御

* 東京大学農学部植物学教室 Institute of Forest Botany, Faculty of Agriculture, Tokyo University.

叱正を得たいと思う。

最も重要な事として、恐らく FAURIE 氏採集の原標本は余り立派なものではなく、その為葉柄基部の鱗片の特長が原記載には述べられていないのではないかと考える。細井幸兵衛氏が1949年に基準産地の小湊で採集された標本 (No. 3135) は恰もその様な不完全なものであるが、僅かにミヤマベニシダ的鱗片がうかがえる。即ちタニヘゴモドキの葉柄下部の鱗片はミヤマベニシダに一致し、タニヘゴとは全く異なるものと確信する。こうなるとタニヘゴモドキをタニヘゴとオクマワラビの間種とする事は疑問となり、やはり FAURIE 氏が野外観察に基ずいたものかミヤマベニシダとタニヘゴとの中間種と考えたのがまさに卓見であると思ふ。私が検し得たタニヘゴモドキの標本を列記すれば、陸奥小湊 (細井幸兵衛, 1949年)・上州尾瀬 (倉田悟, 1951年, 行方沼東, 1955年)・武州秩父 (守屋忠之, 1955年)・信州野辺山原 (岸田松若, 1939年 T・N*) 岸田氏もミヤマベニシダとタニヘゴとの間種と喝破されている)・信州野辺山 (富樫誠, 1939年 N)・三河振草村 (鳥居喜一, 1950年, 井波一雄 1951年) 等である。尾瀬では確かにミヤマベニシダとタニヘゴと混生する所にタニヘゴモドキは生育していたが、小湊及び信州でも同様であろう。しかし、三河にはミヤマベニシダは未だ発見されず、秩父市は附近の武甲山にミヤマベニシダは産するが、守屋氏によればタニヘゴモドキ自生地附近にはタニヘゴの方だけが見られるという。果して真の間種であるか否かは未解決としても、タニヘゴモドキはタニヘゴとミヤマベニシダとの中間的性質を具備している事は明らかである。

(32) **ワカナシダ** (若名羊歯, 新称) 本羊歯に始めて注目したのは昨春、当時群馬県におられた若名東一氏から、前橋市北方の北橋村下箱田木曾神社で採集された標本を拝見させて頂いた時である。イワヘゴに近似のものだが羽片の切込みがずつと深くて一見異なるものと了解出来る。昨夏、若名氏の御案内で木曾神社に自生地を訪れ、かなり詳しく見る事が出来た。同地は赤城山の西麓で、境内に赤城の地下水が豊富に湧出し、拡がって浅い池となり、セキシヨウなどの茂る中に本羊歯も点々と大株を成して生育している。周囲の普通の林床には全く生育していないから面白い。ついて昨年暮、山口県山口市附近の植物を探索した際、三宅貞敏君の案内でイワヘゴモドキらしいものがあるというので現地に行つて見た所、おどろいた事にはこの群馬県のものと同じ品であつた。生育地は滝の上の崖で流水中ではないが、やはり水分は潤沢な所であつた。群馬のものは東京にも栽培し観察を続けているが、今迄に得た結論を述べて見たい。

本羊歯は羽片が半ば程迄深く切込み、羽片の基部に向つては更に深裂し、下部羽片の最基部の裂片は殆んど独立の小羽片となる事もある程でオクマワラビにも似て来るが、それよりも裂け方は浅く、裂片の側脈が殆んど分岐する事なく単一である上、羽片は葉面基部に向つてかなり短小となり、最下羽片は最長羽片の1/2位の長さになる上その巾も広くはならず他の羽片とほぼ同巾であるから、オクマワラビとは明瞭に区別出来る。イワヘゴとは羽片の切込の他、下部羽片が小さくなる事と、葉脈が葉の表面で顕著に凹入している点で

* T: 東大理学部植物学教室 N: 国立科学博物館所蔵標本

異なる。イワヘゴモドキとも羽片の切込以外の之等の性質が一致しない。葉柄下部鱗片の辺縁突起はオクマワラビやイワヘゴより少々顕著でない。このシダは従来少くとも日本では報告された事はないので、植物研究家として令名のある発見者若名東一氏を記念してワカナシダと命名する。

次にワカナシダの学名であるが、支那大陸から台湾にこの類が10数種あり、果してそれ等の何れかにワカナシダが該当するかどうか、記載のみでは容易に判断出来ない。しかるに東大理学部で、CHING氏が同定した雲南 (H. T. TSAI No. 51043, 1932年) の *Dryopteris pycnopteroides* C. CHR. の腊葉が蔵され、之はかなり良くワカナシダに一致する。*D. pycnopteroides* は西支那の四川・貴州・雲南に分布し、葉柄・葉軸の鱗片は褐色で、葉柄下部の鱗片は殆んど全縁、葉面下部は余り縮小せず、羽片の切込もワカナシダより浅い様に記載されているが、上記の雲南の腊葉は葉面の形、切込具合などはワカナシダに一致する。鱗片については群馬県のは黒褐色であるが、山口県のは黒色味が少なくなつてほど褐色を呈する場合があり、葉柄下部鱗片辺縁の突起はワカナシダはイワヘゴ程著しくなく、特に山口県のものにはこの辺縁突起の極めて不顕著な例がある。以上の様にびつたり一致するという訳には行かないが、一応ワカナシダを *D. pycnopteroides* の変異内に入れる事にし、将来更に再検を期したいと思う。

(30) *Dryopteris commixta* TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. 2 : 190(1933); KURATA in Hokuriku Journ. Bot. 3 : 64 (1954).

Distr. Kyûsyû (Provs. Ohsumi, Hyûga, Higo, Hizen and Tikugo), Sikoku (Prov. Iyo) and Honsyû (Provs. Kawati, Kii, Mikawa, Izu and Kazusa).

This fern has intermediate characteristics of *Dryopteris atrata* and *D. Scottii*. The free pinnae are usually 17-20-jugate in this fern, 20-25-jugate in *D. atrata* and 10-13-jugate in *D. Scottii*, respectively. *D. liankwangensis* CHING from South China and Tonkin seems to be a closely related species, but the sori are perfectly exindusiate and the scales of the stipe and rachis are rufo-brown.

(31) *Dryopteris kominatoensis* TAGAWA in Acta Phytotax. Geobot. 6 : 154 (1937), 14 : 100 (1951).

Distr. Honsyû : Provs. Mutu, Kôzuke, Musasi, Sinano and Mikawa.

It is clear that this fern is closely related to *D. monticola*. In shining castaneous-brown scales on the lower part of the stipe, *D. kominatoensis* agrees quite well with *D. monticola*. Moreover the segments of pinnae are provided with long aristate teeth on margin as *D. monticola*. However, the laminae are oblong-lanceolate and more or less narrowed below, and the costae of segments are strongly decurrent to costa. Perhaps, this may be a natural hybrid fern between *D. monticola* and *D. tokyoensis*.

(32) *Dryopteris pycnopteroides* (CHRIST) C. CHR., Ind. Fil. Suppl. 38 (1913); CHING in Bull. Fan Mem. Inst. Biol., Bot., Ser. 8 : 406 (1938).

Rhizome short, thick, erect. Stipes fasciculate, 16-30 cm long, stramineous or pale brown, clothed at base in a mass of pale brown or atro-fusco-brown, lanceolate, long acuminate, sparsely ciliated scales 1.3-2.0 cm long 1.5-3.0 mm wide, scales farther upward are atro-fuscous, copious. Lamina oblanceolate to oblong-elongate, 50-80 cm long 20-23 cm wide, bipinnatifid under caudate pinnatifid apical part, attenuated below. Free pinnae 25-30-jugate, patent, lanceolate, gradually acuminate, subfalcate, base equal and cordato-truncate, short petiolate, 11-13 cm long 1.5-1.8 cm wide, pinnatifid half way down, or nearly down to costa at base in the lower pinnae, often with a nearly free anterior segment. Segments rectangular to ovate, oblique, pointing forward, ca. 4 mm wide at base, apex subtruncate, with 1-3 sharp distal teeth and a few serrulations. Veins in segments in pinnate groups, depressed above, 4-6-jugate, oblique, always simple and undivided (except the lower ones in basal segments being usually forked), the anterior basal vein stops short some distance below sinus or run nearly to the bottom of sinus (but very often run to the margin above sinus in the basal segments in lower pinnae), the others towards the margin and each ended in a prominent enlarged hydathode below the margin. Rhachis copiously and costa beneath sparsely clothed in atro-fuscous or fusco-brown, linear-subulate, fimbriate scales. Texture subcoriaceous, pale green. Sori 3-4-jugate to each segment, medial, rotundate ca. 1 mm in diameter, indusium brown, round-reniform, membranous, entire and more or less marcescent.

Hab. Honsyû : Kitatatabana-mura, Seta-gun, Prov. Kôzuke (T. WAKANA, Sept. 1954; S. KURATA, July 1955); Yamaguti-si, Prov. Suwô (S. MIYAKE, Aug. 1955; S. KURATA, Dec. 1955).

Distr. Western China (Provs. Szechwan, Kweichow and Yunnan) and new to Japan.

The Japanese form seems to be somewhat different from the typical form of China in laminae narrowed below, more deeply pinnatifid pinnae and darker and more ciliated scales of stipes and rachises. However, a Chinese specimen deposited in Herb. Fac. Sci., Tokyo Univ. (H. T. TSAI, Fd. No. 51043, Yunnan, 1932) determined by Dr. R. C. CHING as *D. pycnopteroides*, agrees considerably with the Japanese form. *D. subatrata* TAGAWA from Formosa is a closely related fern.

○本会記事 第5巻を完結する事が出来ました。会員各位の御支援の御陰であり、厚く御礼を申し述べます。特に今号の発行に就きましては、静岡市御在住の会員大村敏朗氏から絶大なる御援助をかたじけなく致しました。誌上をかりて御礼を申し上げます。(里見)